

「等しいとは、現実そのものと等しいこと」について（上）

——チャールズ・オルソン著『人間の宇宙』読解——

平 野 順 雄*

An Essay on Charles Olson's "Equal, That Is, to the Real Itself"
—Reading *Human Universe and Other Essays*—

Yorio HIRANO

キーワード チャールズ・オルソン

『人間の宇宙』

「等しいとは、現実そのものと等しいこと」

Charles Olson

Human Universe and Other Essays

"Equal, That Is, to the Real Itself"

本稿は、チャールズ・オルソン著『人間の宇宙』（Charles Olson, *Human Universe and Other Essays*, 1967）に収められた詩論のうち、「等しいとは、現実そのものと等しいこと」（"Equal, That Is, to the Real Itself"）の読解を通して、オルソンの詩論の核心部に迫ろうとするものである。この目的のために、比較的短いテキストを全訳することとする。

I. テキスト全訳

「等しいとは、現実そのものと等しいこと」の全訳を以下に挙げる。

メルヴィルが生まれる2年前、ジョン・キーツは1817年のクリスマスに無言劇を見て自宅へ歩いて帰る途中だった。劇の後、キーツはまたしてもコールリッジの話を拝聴しなければならなかった。キーツは独り思った、あのように神経質に事実や理由を求めても、それでは十分ではないと。私はそんなものは信用しない。私はむしろ事物の状態に留まっていたい。それがどのようなものになろうとも、神秘や混乱や疑問になろうとも、事物の状態には力がある。それが、私の考える否定的能力（*Negative Capability*）だ。

キーツは、図らずも、次の世紀に届く刃で（had put across the century the inch of steel）、ヘーゲルを破滅させることになった⁽¹⁾、もし何かができたとしたらだが。5年の内に、二人の幾何学者ボーヤイ（Bolyai）⁽²⁾とロバチェフスキー（Lobatschewsky）⁽³⁾は、ユークリッドの世界像に満足できなくなり、それぞれが独力で新しい世界像を作った。二人の世界像は驚くほどよく似ていた。ドイツの数学者リーマンが現実（reality）を定義するのに31年かかった（メルヴィルが『白鯨』を書いたのは31歳の時だった）、人間がずっと現実を搾取してきたためだ（as men since have exploited it）。リーマンは二種類の多様体を区別した。

*人間関係学科 教授

不連続な多様体（これは古い体系のもので、ソクラテス以後の談話⁽⁴⁾や言語を含む）と、より真実に近いと考えられる連続的な多様体とに区別したのである。

メルヴィルはこういう事を何一つ知らなかったが、アメリカ人としてこれに深く関わり、腰を据えて取り組み（down to his hips in things）、量を内包とする新たな等式の（ランボーが生まれたのは、リーマンが就任講演 [inaugural lecture]⁽⁵⁾を行なった1854年のことである）最初の実践家になったのである。

この本⁽⁶⁾の基になる考えは自然主義であるが、それはメルヴィルと取り組む際の役には立たない。そのような時代に生きた人の人生を描いた物としても、芸術を描いた物としても取り柄がない。メルヴィルの作品は、現実の再定義から起こった最初の空間芸術であり、その点で、ホメロス以来、初めて不連続のもつ厳格さから解放されたものなのである。自然主義は、それを18世紀の考えと取ろうと19世紀の考えと取ろうと、上で述べた出来事によって、すでに廃れていた。しかし、ああ、スターン氏は自然主義をあらゆる風に受け取った。その中には、次のような不適切な考えも含まれている。トウェインやドライサー、ヘミングウェイ、そしてフォークナーが用いた文学的方法（literary use）の先頭にメルヴィルを位置付けることができるという考えである！

それは自然主義の中にある問題に関する誤解で、その誤解ゆえに自然主義は訴える力を失った。つまり、自然主義によって現実を避けることができるのである。取り残されるのは、現実である。どんな犠牲を払っているにしても、いたる所でスタイン氏は自然主義に踊らされる愚か者の一人なのである。スタイン氏は、自分の自然主義観を要約しながら、メルヴィルが次のことを証明したと書いている。

現代の数年間における自然主義的な感受性は苦しみから、物質主義だけでなくヒューマニズムと社会的理想主義という深い道徳性を取り出すことができたし、また取り出さなければならなかった。それこそが、知恵の本当の始まりなのである。

本当に始まったのはスーパーマーケットだけだ——正確な死者の量が示すのは、それだ。本当に始まったのが数なら、延長なら、また物に対する欲望なら、とりわけ人間の中にある欲望ならば。

19世紀が確実に引き起こした変化は、20世紀によって浪費されている、その変化の真相を知らないまま濫用するためだ。メルヴィルは、その変化の一部であった。だが私は、このような本を前にすると、メルヴィルがどのようにそうであったのかを、変化との関連で示してみることくらいしかできないのである。この変化については、メルヴィル自身が正確に述べている。『白鯨』（1851）を執筆していた時に、ホーソンに宛てた手紙の中の一文でこう書いている。「目に見える真実によって私たちが言いたいのは、目の前にある物が絶対的狀態にあることを理解してほしいということなのです。」

19世紀には、ありとあらゆるものが、再び登場してきた。観念は揺れてあいまいになり、力と動きが諸事物の重要な構造になった。それは力と動きの2者が複数であり、場合によっては一塊になったからである。無限小の世界では、古い空間概念がまったく無効であることも証明された。量が——計測可能であり計数可能な——量が突然、あらゆるものの基軸に据えられたようだった（was suddenly as shafted in, to any thing）。また、すでに明らかなように、外部世界の驚くべき特徴は、すべてのものが間違いなく伸びてくることである（that

all things do extend out)。無力な事実など今やない。すべてのものは、感じるためにあった。感覚を促進するために、そして感じられるためにあった。そして人間は、感覚の真ただ中で、どのように自分が包み込まれているのか (how he was folded in) をよく理解したのである。また、よく理解したのは、どれほど突然、そして目覚ましく、人間が全力を出して (extend himself)、跳躍することができるか、動くことさえせずに、進み、遠くへ、最も遠くへ進むことができるかであった——人間は突然、捕らえられるか、再び捕らえられるかしたのである。存在の特徴に、様々な物の中のある物に、それを私は人間の身体性と呼ぶ。身体性によって、宇宙が再び人間に入るか、人間が再び宇宙に入るのである。現実には中断はない。だから、如何にすればすべての行為と思想をもう一度立て直せるかを、我々はいまだに探しているのだ。

身体性を書くことに関連づけてみると、たとえば、不連続は、談話にとって、もはや満足できる基盤ではなかった。等級分け (classification) は単なる分類 (taxonomy) であることが露わになっていた。そして論理は (そして論理に支えられる文は、完成した思考であって、出来上がったばかりの力の交換ではないのである)、肉体や魂と同じく、ゆるい不正確な組織で、互いに分離しており、固い箱の中でカタカタ音を立てている棒のようなものである。

早い時期にメルヴィルが受け継いだ現実と行為の関係は、このようなものである。そして、このように捉えなければ、われわれはメルヴィルを完全に捉え損ねてしまうのだ。一つだけ付け加えておこう。測定の問題である。厳格さが消滅する時、測定に何が起こっただろう。ニュートンの『注解』^{スクリウム}(7)は縮絨機だと判明したとき、メルヴィルはベーコンを感じ取った、あの時計職人の頭脳とメルヴィルが呼んだベーコンを経由していると。宇宙が急に動いても、創造の流れそのものによる部分を除けばどの部分も他の部分と不連続ではないとしたら、測定とは何であろう。内も外も、かつては量的に見えたところが内包的 (intensive) で、しかも最も広いところが外延的 (extensive) であるなら、しかもそれさえも包括する力を我々が持っているとする。リズムは、優れている度合いとは無関係に韻律 (meter) に囚われてきた (我々の言語なら、シェイクスピアとチョーサーの韻律が優れている) が、突然、現実を着実に汲み上げるようになったので、詩の芸術は (art) 新たな韻律 (measure) を考案する必要が出てきた。

メルヴィルを生涯にわたって観察すると、自分の肉体と魂を一つの山にし、その上に頭脳を置いて紛糾させる (これは、人間の身体性を表現する方法でもあった)、そんなことを自分の散文にさせようと試みるとか、言語の韻律に乗って本を書き、さらに他人の体験まで書こうと試みている。メルヴィルの生涯は、現在の、すなわち、20 世紀中葉の芸術、絵画や音楽、そして物語や詩の中で考える方が、前の時代の中で考えるより、意味の分かる研究である。メルヴィルに欠けていたのはイメージではなかった、どんなものでもなかった。おそらく、自分のしている事が正しいと信じられる根拠なら何でもよかった。自信の根拠になるあらゆるものをメルヴィルは、様々なやり方で、身の回りの知人から、取り込んだ。あるいは『信用詐欺師』を大いに気に入った私の友人ランドロー (Landreau)⁽⁸⁾はメルヴィルの状態をこう述べる。「メルヴィルは『幻滅する』(‘disillusion itself’) 権利を持っていたようだ。彼の個人的な生活は辛かった、おそらくこの考え方のためだ、彼は幻滅を、現実の場面で、自分が生きる社会で味わわなければならなかった。」

身体性から何が求められているかを、今でも分かっている者がいるだろうか、身体性はど

れほど隠し、どれほど露わにするのかを。メルヴィルが鯨の尾そのものにどれほどの直接性を与えようとしたのかについて、語ろうとした者はまだ誰もいないのである。科学技術に関するメルヴィルの知識を分離する方が、彼の魂と著書の両方に見られる位相性を研究するより容易である。しかし、私の経験では、位相性に包含される形体感覚 (sense of form) のみが、形態学の提供する曖昧な形体の型 (the vague types of form) と幾何学特有の観念的構造 (the ideal structures) を見分けて、両者の間に入り込むことができるのだ。そして、この形体感覚のみが、メルヴィル特有の能力を説明するのである。すなわち非常に大きいものを（たとえば、彼の描く鯨、白さについて語る彼自身の言葉、あるいはエイハブの偏執狂）小さなものによって示す能力である。

新たな原子論の世界が提示したのは、不連続とは異なるトポスのみならず、ある韻律法であった。新たな世界では、一致 (congruence) が、すべてのものを数学者の手にのせてロバチェフスキーのもとに運んで行った（とりわけ、メルヴィルの同時代人ケーリー [Cayley]⁽⁹⁾と、フェリックス・クライン [Felix Klein]⁽¹⁰⁾を経由して）。一致なら十分意味は通るが、他の韻律では、メルヴィルの散文を説明できないのだ。一致は、カントにとって空間的な直観だった。そして、メルヴィルが空間的な直観を持っていたという私の考えが正しいならば、メルヴィルは生まれた時からその直観を持っていたのである。この世に生まれた時、アメリカという場所に生まれた時から。一致は、メルヴィルの世紀に発展していった。それは、空間を測る基準で、一つの固体が空間中の2か所を占める方式をとるものだったのだが、それが極めて柔軟な1対1の写像機能 (mapping power) を持つようになったのである。その結果、同じ状態を保つ物は、どこへ行こうと、どのような変化をこうむる環境に入り込もうと（変形することはありえても）、この物は追跡することができる、そして、もしそれが芸術である場合、率いられながら、包含するのだ、散文にとって非常に大切な物理的な量 (physical quantities)、すなわち、速度、力、そして場の強さ (field strength) を。

メルヴィルの散文は、用いている修辞と矛盾しそうなことを幾つも行なっている。メルヴィルは何とか工夫してほとんど常に思い通りにしている。たとえば、ホメロスを除くどの作家よりも、包括的な空間を作品に付与している。たとえば、鯨の頭部からタシュテゴを救出する場面がそうだ。重要なのはまた、『白鯨』の総合的「空間」である。その空間から『白鯨』はできているのだが、その空間は、投射空間の特質を持っている（そうでなければ、作品の特質のすべては、もっと親しみの持てる、円熟したものとして現われるだろう、その場合、作品の特質はユークリッド幾何学の内部に留まるからである）。だから私は結論する、メルヴィルは謎めいた大げさな空間を作り上げることに失敗したのだと（メルヴィルは透明であると同時に均質な物を際立たせる）我々には理解できていない、一致のみが可能にする変容をメルヴィルが用いていないならば、の話であるが。（彼の詩に、一致が欠落しているとすれば、彼の人生におけるキーツが知っていたような否定性は、メルヴィルがどこまでは進まなかったのかを示すものである）。

彼の観念も、そうである。メルヴィルの時代の語彙があつたにもかかわらず、われわれが知っているよりも、はるかに多くの語彙がメルヴィルの作品に見出せるのである。ホーソンに宛てた手紙を私は引用したが、引用していない部分でメルヴィルは、目の前に有る物の絶対的影響について語っている。自己や、存在や、神に対する影響を語りながら、メルヴィルは、街の通りで神をわが物とするように主張している。これは1851年に必要とされた人間の思想としては第一級の突破口であつたと私には思える。すなわち、事物の世界にあっては、

神の側が世俗化しなければならないという考え方である。(世俗化によって神聖は減じなかった。メルヴィルが超越に対するユダヤ的思考をかなぐり捨てたのは、おそらく生涯のうちで一度だけだった。)

あるいは、アカデミズムが古典アメリカ文学に関して膨大な時間を無駄に使ったまさにその場所でメルヴィルを捉えてみよう、すると、スターン氏がまたしても時間を浪費している。メルヴィルとその同時代人における寓意と象徴のありかなどを考えているのだから。師⁽¹¹⁾が夢の中で私に語ったように、リズムに関しては、イメージがあり／イメージに関しては知の働きがある／知の働きに関しては／構造がある。ここで正当な証拠を提供するのは、相対性理論よりも量子物理学である。それは、自然主義に反対して、目に見える真実を私は求めると宣言した時にメルヴィルが掴もうとしていたものである。たとえば、光は波動であるだけでなく微粒子でもある。あるいは、電子(electron)は微粒子であるだけではなく波動でもあるなどのことを。メルヴィルは客体(object)を乱用できなかった。象徴は主体を優遇するために客体を貶めて乱用したのであったが、また、寓意は、イメージの生起する場を平気で移動させるのだが、メルヴィルはイメージを生まれた場から移動することによって相関力(relational force)が失われることを恐れた。メルヴィルはすでに、われわれがどのようにして現実を知なのかと、どのように現実を表現するのかの二つの組——イメージと客体、行為と主体——の片方が持つ相補性に気付いていた。その両方が以後決定的な成果を上げたのである。この話の終わりに来て、私はポロックやクラインの絵画、それに最近のアメリカ小説や詩を考えている。そして、メルヴィルの話の終わりは、鯨そのものが例になる、100年以上前に書かれてそこにじっとしている鯨は何と様々なことを物語ってくれることだろう。鯨自身に含まれており、内在的で、しかも鯨にとっての挿話を。

メルヴィルは誘惑されなかった。ホイットマンは誘惑され、エマーソンとソーローはまた別の誘惑のされ方をした、肉体を誇張するように。家をモデルに、モデルを家にとってみよう、死は開いた道だ⁽¹²⁾、魂と肉体はボートだ、などと。メルヴィルは、肉体を精神化することもやはりできなかった。ホーソンは、ミロワール氏(M. de Miroir)などの鏡のイメージ群を用いて、それを試みた。メルヴィル自身も、『鐘楼』(The Bell Tower)では試みたが、『エンカンタダス』(The Encantadas)や『バートルビー』(Bartleby)では試みなかった。それに、どのように説明したらよいのだろう、『ベニト・セレーノ』(Benito Cereno)の中で、「あの黒人」("The negro")の発言がどのような仕組みで人を寄せ付けずに、救うことになるのか。このように言えばよいとメルヴィルは知っていた訳ではない。しかしどれほど立派な一致する理由があろうと、メルヴィルは本質的に寓意も象徴も使えなかったのだ。鏡やモデルはユークリッド空間内のそれぞれの姿であって、それらは一致しない。それらは、不連続の跳躍を必要とするのである。

最後に、ここで示唆された可能性を取り上げて、徹底的に考えてみよう——実際の登場人物と現実そのものの構造を。私が注意したいのは静けさ、あるいは受動性、メルヴィルの言葉、彼が何ごとかを知っている事についてである。少なくとも3度目に捕鯨船に乗って太平洋に出た時には、彼自身が操舵手として働いたのだから。メルヴィルはどこかで言っている、鰯は安らぎの中から放たれる時のみ、正確に飛ぶのだと。その安らぎをメルヴィルは白い鯨の安らぎにたとえる。白い鯨が最後に近づいて来るとき、素早さの中に途方もなく柔和な安らぎをたたえている、とメルヴィルは書いている。同様に、エイハブの偏執狂を扱うときに、

メルヴィルは別種の人間を、神々しい無為（the Divine Inert）の法廷と呼ぶ一団に属す人を設定したのである。

私は無為に関するメルヴィルの思想の諸局面を強調することができる、なぜかと言えば、注意してほしい、それぞれの場合、無為の感覚もしくは無為の必要性、あるいは安らぎの状態としての受動性の感覚が、メルヴィルの考案した最も迅速で強力な行為と結び付けられるからだ。鯨自身の素早さ、エイハブの尋常でない意志、そして銛打ちが銛を放ち、鯨を殺す能力。世界は無為の構造によって成り立っているのが現実で、その現実が事物に影響を与えるだけでなく、次にはその影響を受けるのである。

『白鯨』とその作家を体験することについて、次の事実が最も適切であると、私は思う。『白鯨』は、先立つ分だけ少ないどころか、リーマンの観察のより特徴的なところを持っている。すなわち世界の韻律的構造は、無為の構造と非常に親密に結びついているために、韻律の場（芸術とは測定である）は必然的に柔軟になる（今日われわれが絵画や文学や音楽に見出すものだ）その瞬間、無為の場それ自体が柔軟になるのだ。

このことは、重力現象と、無為の場が物体に依存していることから、アインシュタインが確立したものだ。私は包括的であろうと心掛けていて、初めの論点を貫くためだ。それは、もし人間が、ある種の芸術や科学の外側で今日もなお最もなし難いことを行なわなければ、人間よりも事物が広範な危険をもたらすということだ。最もなし難いこととは、事物が、それも現在の事物が絶対の状態にあることを信じることだ。事物が絶対的状态にあるのは、現実の構造が柔軟だからだ、量子は解体して波動になる、すべては流れるが、存在し、永遠になるのだ、手段が等しければ。

「等しいとは、現実そのものと等しいこと」の全訳は以上の通りである。[以下 次号]

本研究は、平成 25-28 年度科学研究費助成事業、基盤研究（C）25370316 の支援を受けた。

注

1. イギリスロマン派の詩人ジョン・キーツ（John Keats Bolyai, 1795-1821）は、その否定的能力もしくは消極的能力によって、ドイツ観念論の大成者ヘーゲル（Georg Wilhelm Friedrich Hegel, 1770-1831）を 20 世紀になっておびやかした、という意味であるが、正確には分らない。
2. ボーヤイ（János Bolyai, 1802-60）は、ハンガリーの数学者。平行線論を研究したハンガリーの数学者ファルカス・ボーヤイ（Farkas Boyai, 1775-1856）の子。非ユークリッド幾何学の建設者の一人。
3. ロバチェフスキー（Nicholay Ivanovich Lobachevsky, 1792-1856）は、ロシアの数学者。非ユークリッド幾何学を創始した。
4. 談話（discourse）とは、言葉による思想の伝達、会話、話の意。言語学では、文（sentence）よりも長く、かつ、まとまりをもった言語単位を意味し、話されたものも書かれた。
5. ゲッティンゲン大学講師就任講演である。
6. 原注によれば、*The Fine Hammered Steel of Herman Melville*, by Milton R. Stern (Urbana: University of Illinois Press, 1957) である。
7. ニュートンの『^{スコリウム}注解』とは『プリンキピア』として知られる、ニュートンの著書『自然哲学の数学的原理』（*Philosophiae Naturalis Principia Mathematica*, 1687 年初版）の 1713 年版に付け加えられた、難解なテクスト。ここでニュートンはデカルトやライプニッツに反対し、神の本性に関する試論を展開している。

「等しいとは、現実そのものと等しいこと」について

8. ランドロー (Landreau) 不詳。
9. ケーリー (Sir George Cayley, 1773-1857) は、英国の科学者・発明家。空気力学の先駆者。人間を乗せて飛ぶことのできるグライダーを初めて製作した (1853)。のちに飛行機製造に使われる設計原理を定式化した。英国航空界の父と呼ばれる。
10. フェリックス・クライン (Felix Klein, 1849-1925) は、ドイツの数学者。ゲッティンゲン大学教授 (1886-1913) 群論を用いてさまざまな幾何学を総合した論文 *Erlanger Programm* (1872) は、幾何学の発展に大きな影響を及ぼした。
11. 師 (Master) とは、エズラ・パウンド (Ezra Pound, 1885-1972) を指すと思われる。チャールズ・オルソン著『マクシマス詩篇』 (Charles Olson, *The Maximus Poems*, 1983) 中の “The Twist” 冒頭にバウントらしい人が出てくる。86 頁参照。またジョージ・バタリック編『チャールズ・オルソン著「マクシマス詩篇」案内』 (*A Guide to The Maximus Poems of Charles Olson*, 1978) には, “The Twist” に関する参考文献が載せてある。その 125 頁を見ると夢の中に出てくる師はエズラ・バウントである。拙稿を参照されたい。平野順雄「夢の記述—『マクシマス詩篇』「トゥイスト」について」(上)(下)『梶山女学園大学研究論集』第 30 号 - 第 31 号 人文科学編 1999-2000 年。
12. 死は開いた道だ、というフレーズは「開いた道の歌」(Song of the open Road) を意識したもの。「開いた道の歌」は、ホイットマン作『草の葉』(Walter Whitman, *Leaves of Grass*, 1892) のカラマス詩群 (Calamus) に収められている。

引用文献

- Olson, Charles. “Equal, That Is, to the Real Itself” in *Human Universe and Other Essays*. Ed. Donald Allen. 1965 New York: Grove Press, 1967. Print. 117-122.
- . *The Maximus Poems*. Ed George F. Butterick. Berkeley: University of California Press, 1983.
- Butterick, George F. *A Guide to the Maximus Poems of Charles Olson*. Berkeley: University of California Press, 1978.